学童疎開の思い出

小澤三郎
白鷺二丁目

いま私の前に一冊の古びたノートが置かれている。そこには細かい字で私の野方北原小学校時代に体験した、学童疎開の記録がびっしりと書き留めてあり、黄ばんだそのページをめくっていくと、半世紀前の思い出が鮮明に甦ってくる。

真珠湾奇襲によって告げられた大東亜戦争開戦のニュースと、次々に報じられる緒戦の勝利に日本国中が沸き返り、牙城といわれたシンガポールが陥落するに及んでその熱狂も頂点に達し、町々に提灯行列が華々しく繰り広げられ、口々に万歳を唱えて祝い合った。

しかし、昭和十九年になって戦局は一変した。アッツ島守備兵の玉砕、山本五十六の壮烈な戦死、そして、サイパン島のわが軍全滅と悲報が相次ぎ、B29爆撃機のわが本土空襲が頻繁となった。ここにおいてやっと時局の重大さに気づいたのである。

戦争相手国の米英に比し、わが国の人的、物的資源は大差があり、日毎に戦闘能力の差は表面化していった。国は戦闘に必要な資源の確保に奔走しだした。そして、あらゆる金属品を国民の中から供出させ、寺の釣鐘や校庭にあった二宮金次郎や楠木正成の銅像もいつのまにか視界から消えていった。ついには私達の服のボタンや帽子に付けていた校章まで、ボール紙製のものに替えられた。また、国は「生めよ殖やせよ」と大々的に唱え、子沢山の家を表彰した。

空襲に備え、家ごとに玄関先に防火用水が置かれ、窓ガラスには白い紙を貼ることを義務づけられ、学校へは防空頭巾を被り、本籍・住所・氏名・血液型を記入した名札を服の胸に縫いつけて通学するようになった。

学校では毎日、避難と消火訓練が行われ、授業はほとんど進まぬ状況になるに及んで、国の方針でより安全な場所で勉強を続けられるようにということで、個人で田舎に知人がある人と病弱で親の傍を離れられない人以外は、強制的に学童疎開をさせることになった。

北原小学校は三年以上の生徒が福島県に学童疎開をすることに決まった。

昭和十九年八月二八日、父母から懇切な注意を受け、リュックを背負い肩から水筒をぶら下げて家を出た。親元を離れたことのなかったわずか十歳の年端もいかない子供にとって、親との別れの辛さは言い表し得ないものがあった。しかし、《神国日本》は戦争に絶対負けるはずはないと信じての出発であり、皆の顔にも何の悲壮感もなかったように記憶する。学校に集合してから中野駅に向かう。親兄弟そして親戚の人々の見送る中を、汽車は駅のホームを離れ福島に向かった。

常磐線泉駅から小名浜臨港線で小名浜駅に降り立ち、地元の小学生の出迎えを受け、さらにバスで江名町永崎海岸まで行き、そこから約二キロの田舎道を歩いて、やっと山の中の一軒家である宿舎の地切鉱泉に着いた時は、すでに夕方であった。

私達五年生男子の疎開生活はこの湯治場の宿で始まった。

宿にはまだ電気は引かれておらず、太陽が山間に没する頃、ランプが各部屋に灯される。六名を一班として数班に区分され、それぞれ部屋を割り当てられた。そして、先生のご指導のもと、寮母さんに身の回りの面倒を見て頂く中で、私達の日常のスケジュールもきちんと決められた。

午後九時、点呼を終えて就床となる。寝床に入り、夜の闇を通して、山を超えて聞こえてくるザーザーという波の音とともに、日中は忘れていた東京の両親や兄弟の顔が思い出され、シーンとした部屋のあちらこちらから啜り泣く声が聞こえてきて、数日後には遂に夜逃げ事件まで起きた。

しばらくして、この宿にも電気が引かれることになり、全員汗まみれで山を越えて太い電柱を運んだ時の苦しかったこと、そして、夢にまでみた眩いほどの明るい電光が点り、皆で飛び上がって喜びあった時のことはいつまでも忘れられない。

この土地にも次第に慣れて、海の白い波を追い駆け、貝殻や海藻を採った。生きた蛸を捕まえたこともあった。何しろ食い気盛りの年頃で、毎日のあてがわれる丼飯だけでは物足りなかった。そんなわけで、山へ行っては百合の根を堀り、時には畑からさつま芋などを失敬して生のままむさぼり食ったし、山で蛇を見つけては尾をつかんで地面に叩きつけ、皮を剥いて火に焙って食べた。甘味に飢え、「ミクローゼ」という名の何に効くか分からないが甘い錠剤を、先生の目を盗んでは町の薬屋で買い求めることを覚え、小遣いの大半を消費した。また、近くの川や沼で魚釣りに興じ、夜になると皆で大声で軍歌をうたって淋しさを吹き飛ばした。

疎開生活の中で最も楽しかったのは、「郵便」と「面会」であった。

戦局も一層悪化し、わが家でも東京には父母が残っているのみとなった。上の兄は北支（中国北部）に、下の兄も学徒動員の最中に赤紙が来て茨城で兵役に服していたし、おばあさんと姉は富山に縁故疎開をした。そして、この福島に私が学童疎開

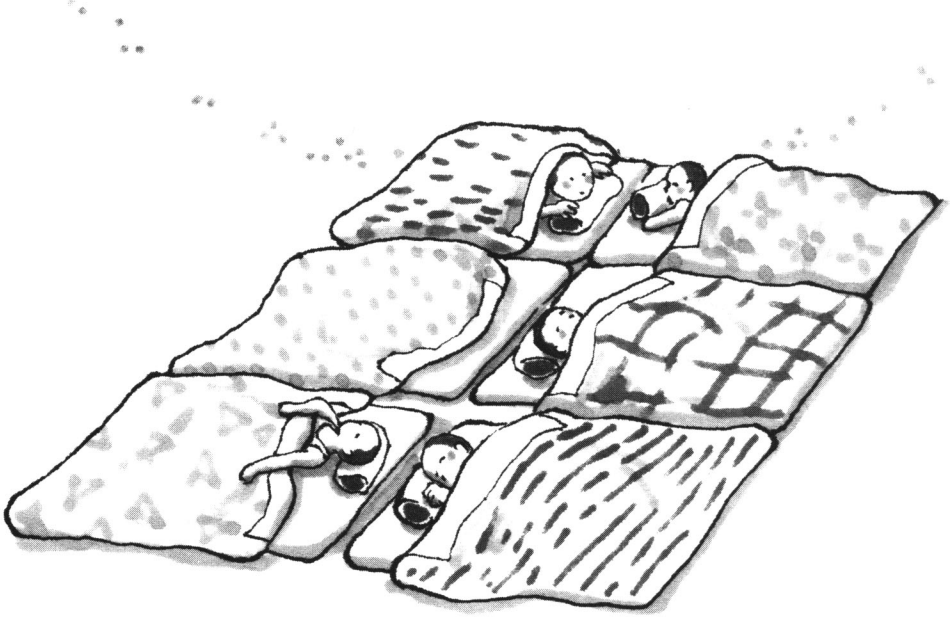
―こうして一家が五か所に離散していた。しかし、幼い私に各地から頻繁に激励の便りが届いた。これらの便りはいつもポケットに大事に入れて何度も貪り読んだ。そして、今でも大切に保管している。

また、何か月に一度という頻度ではあったが、家族がこの福島に面会にきてくれた。家の近所の人が来るときには、その人に言付けものをしてくるので、自分の親でなくとも面会に来る人があると〝届け物が有るか〟ととても楽しみであった。

面会に来てくれた母も、二日して再び東京へ帰って行った。その前の晩、母と同じ布団に寝た幸せは忘れられない。その母もすでに他界してしまった。

こうした地切鉱泉での生活に別れる時が来た。この小名浜も海軍基地となり、連日敵艦載機が来襲するようになって、十か月余りの生活を送ったこの地を離れ、さらに奥地の会津へ再疎開し、蟬の大合唱のなか、栄養失調の状態で終戦の玉音を聴いた。

学童疎開を通じ、先生、寮母さんのご心労はいかばかりであったか。また、学校当局も幾多の難関に直面されたことであろう。一疎開児童として改めて感謝の念で一杯である。

一年余りのこの学童疎開の体験は、私の人生の中で最も貴重なページとして、いまなお鮮烈な光を放っている。

そして、この疎開体験を通して、国のためにも、家族のためにも平和の時代が永久に続いて欲しいと願わずにはおれない。